平成 19(2007)年度入試の出題意図、採点総評　≪一般選抜≫

●　外国語学部　前期日程（英語）

＜出題の意図・ねらい＞

英米学科では、国際社会で生き抜くフロンティア精神を持った学生、英文読解力やリスニング力などバランスの取れた英語運用能力を備えた学生、また英語圏の文化や社会に対する幅広い知識を備えた学生を求めている。試験では特に英語の実用的運用能力をみる。高等学校卒業程度の基礎学力とともに英語読解力、英語表現能力、英語リスニング能力を判定する。

＜答案の特徴と傾向＞

問題 1

長文読解。時事に関する英語長文を読み、内容をどの程度理解できるかを問う問題。内容を問う問題は比較的良く出来ていたが、英文和訳の問題は正解率が低かった。

問題 2

長文読解。ことばについて論じた英語長文を読み、内容をどの程度理解できるかを問う問題。比較的容易な内容を問う問題は全体的に良く出来ていたが、難易度の高い内容把握の問題は、要点を的確に押さえられず、正解率が低下した。英文和訳は構文をきちんと理解している答案が少なかった。問題 1 と比べると全体的に正解率は低かった。

問題 3・問題 4

和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う問題。基本的な語彙力、文法の知識を用いて、正確な英文を書く力が試された。語彙力はあるが、文法的・構文的に正確さを欠く答案が多く見受けられた。問題 4 より問題 3 の方が比較的得点が高かった。

問題 5

英文エッセイ。与えられた英文のテーマに従って、短いエッセイを書く英語力を問う問題。明快な主張がなされ、的確な理由を述べている答案がある一方、主張のみで理由が十分述べられていない答案も見受けられた。

問題 6

英語リスニング。短い日常会話を聴き、理解できるかを問う問題で、全体的に正解率は高かった。

問題 7

英語リスニング。特定のテーマの英文エッセイを聴き、内容を理解できるかを問う問題で、難易度は問題 6 より高い。正解率も問題 6 に比べると若干低かった。

●　外国語学部英米学科　後期日程（小論文・英語リスニング）

＜出題の意図･ねらい＞
英語の実用的運用能力をみる。高等学校卒業程度の基礎学力とともに英語読解力、論理的思考能力、英語リスニング能力を判定する。

＜答案の特徴と傾向＞
問題１は小論文の問題。
問１は比較的長い英文を読んで、内容を日本語で要約する力を見る問題であった。全体の３割程度は設問文の論旨を十分に把握していると認められる答案であった。要約に至らず一部の英文を和訳したのみの解答や、断片的な情報をつなぎ合わせ、正確さに欠ける内容のものも見受けられた。

問２は英文中に示された筆者の見解に対する自分の考えを、決められた字数内で論述する力を見る問題であった。質問に対する自らの見解をきちんと論述した、説得力のある答案が多数あった。しかし、設問文の主旨とは関連の薄い答案や、個人的な体験談のみに偏った答案も見られた。

問題２は英語リスニング。
第１部は英語で行われる日常的な会話を聴いて理解出来るかを問う問題で、正答率はかなり高かった。

英語リスニングの第２部は英語で行われる長めの日常会話を聴いて、内容が理解出来るかを問う問題で、平均正答率は６割程度であった。

英語リスニングの第３部は特定のテーマの英文エッセイを聴き取り、その内容が理解出来るかを問う問題で、平均正答率は６割程度であった。

●　外国語学部中国学科　後期日程（小論文）

＜出題の意図･ねらい＞
　課題文を着実に読み取り、筆者の言わんとするところ、また比喩表現を理解し、それを的確に表現できるか。また、それに対して自分の意見を幅広い観点から述べられるか、等を評価の基準とするような出題を意図した。

＜答案の特徴と傾向＞
１）問１に関しては、比較的要約が出来ている答案が多かったように感じられた。特に、「本当の教育」というものを、「神話」の属性を使って説明するところが予想以上に書けていた。事前によく練習してあるようだった。

２）しかし、問２で、それについての自分の考えを述べる問題は、ほとんど出来ていないと言ってもよかった。問１が良く出来ている答案でも問２がまったく出来ていないものが目立ったことから、内容をしっかりと噛み砕いて理解できていないのではないか、と思われる。

● 外国語学部国際関係学科　後期日程（小論文）

＜出題の意図とねらい＞

この試験では、設問１で、経済的な貧困問題が構造的に発生するメカニズムを課題文の中からうまく抽出・整理することができるかどうかの論理力、設問２で、そのような経済的貧困が「貧困」問題として立ち現れてくる社会的なメカニズムを把握できているかどうかといった抽象的理解力を見ることをねらいとした。

設問３では、これらをもとに、グローバル化によって生じる「問題」を確定し、その発生・維持の仕組みを踏まえた構想力を見たいと考えた。

＜解答の傾向＞

設問１

設問１では、エビ養殖に関わる漁民・農民の「貧困」が生み出される構造を説明することが課された。答えとしては、エビが先進国を消費地とする国際商品であり、先進国を基盤とする国際資本が、生産国の伝統社会における階層的経済構造の上層部に位置する富裕層である国内資本と連携し、下層部に位置する漁民の低賃金労働を利用したり、農地や原生林を強引に養殖地に変え、農民の生活を困窮化させたりするような形で、利益の追求を行っていることが挙げられるべきであった。多くの受験生は、国内の構造についてはある程度説明出来ていたが、国際的な構造を明確に説明できていなかった。また、問題文の内容を理解した上で、自分の言葉で表現出来ていない答案が多かった。

設問２

課題文が難解であったにもかかわらず出題自体は容易であったため、課題文中からのキーワードを抜き出して解答しているケースが目立ち、受験者が自身の言葉に直していない答案が目立った。また、制限字数の半分に満たない解答も若干見受けられ、時間が不足した受験生もいたようである。

設問３

設問３は、３つの課題文の内容をもとにグローバル化の問題点を論じてもらう問いであったが、課題文の内容をふまえた論述は半数近くにとどまった。また、①構造的貧困が維持されているメカニズム、②グローバルな世界経済に人々が全面的に組み込まれてしまっていることの問題点を理解した上で、③解決の方向性を展望する、といった議論を採点者側は期待したが、問題解決の方向性を論理的に展開している答案は少数であった。

● 経済学部　前期日程（英語・数学）

＜出題のねらい＞

（英語）

経済学部で必要とする英語能力の基礎を長文・短文から問う内容で、読解可能と思われる産業社会のテーマ（リーダーシップの生成、自動車業界の動向、仕事のストレスなど）を中心に問題を作成した。

（数学）

本学の数学入試では、基本的な問題が主に出題されています。単なる暗記力や計算力よりも、基本的な定理や公式の理解力と論理的な思考力を試すのがねらいです。どのように論理展開すればよいのかを的確に判断する力を見るのがねらいです。また、出題の範囲に十分注意してください。

＜答案の傾向と特徴＞

（英語）

問Ⅰにおいては、リーダーシップに対する著者の経験談や説話を読み取るだけの読解力を必要としたが、総じて長文読解力の高さが解答結果に反映されていた。また短文を中心とする問Ⅱは解答肢選択の出題となったが、およそ６割程度の正解率に達しており、所定のレベルに達する受験生の割合は例年と大差なかった。

（数学）

■問題１

このレベルの問題は確実に解けるように準備して欲しいと思います。が、期待していたほど正答率は高くありませんでした。小問（１）（２）は、ほぼ全員が正解でした。小問（３）は、考え方は合っているものの、半径の計算や円の面積の計算でミスがありました。小問（４）は、内接円の面積がどのような数列になるかという視点で考えれば、それほど難しくないと思われます。が、半径に注目したため、複雑に考えて正解に達していない答案があるなど、あまり出来はよくありませんでした。

■問題２

絶対値記号をはずすことに失敗している解答が目立ちます。また、絶対値記号を数式で処理した後、グラフ化することに失敗している解答も目立ちます。困難なく場合わけできるよう、２次関数のグラフとともに、計算練習量を増やして欲しいと思います。

■問題３

三角比を用いた図形の基本的な表現が十分に身についていない受験生が多く目立った。特に、直線が円に接する条件を十分に理解できていない答案が多かった。また、三角関数の基本的な公式を用いた計算では、計算ミスが目立ち基礎的な計算練習を十分に行っておくことが必要です。

三角関数や直線や曲線などについては、関数表現とグラフとの関係を十分に理解するように日ごろから図形的な感覚を養っておくことも大事です。

■問題４

確率の基本的理解を問う問題だったので、できている人とできていない人の差がはっきりと分かれていた。また、全体として計算ミスが目立ち、考え方は正しいのに満点を取り損ねている人が多く見られた。

●　経済学部　後期日程（小論文）

＜出題の意図・ねらい＞

出題に際しては、「市場」と「市」という、経済学において基本となるテーマを包摂した課題文を選んだ。文脈の一部に歴史的な側面からの記述が含まれているものの、丁寧に読めば、内容を十分に理解できる文章であろう。

設問１と２は、集中力をもって読解すれば、比較的容易に解答できる程度の設問とした。文意を正確に読み取る読解力とともに、主旨を簡潔に要約する能力を測ることを目的とした。

設問３では、課題文を手がかりに、「現代の経済活動における情報の役割」について、具体例を交えて受験者の考えを論じさせる設問とした。考えを論理的に組み立てる能力と、その結果を相手にわかりやすく伝える、受験者の説明能力を測ることを目的とした。

＜答案の傾向と特徴＞

①（設問１と設問２について）

設問１については、約７割の受験者がほぼ正確に解答した。設問２についてもおよそ８割以上の受験者が、概ね５割以上の正答率を得ていた。しかし設問文中にある、「本文に即して具体的に」という出題意図を、汲み取れてない解答が目立った。

②（設問３について）

率直なところ、評価に値する解答は少なかった。情報の役割や本質を捉えた課題文を読んでいながら、情報技術などの側面を論じるにとどまる解答が目立った。また、自分の考えを示さず、具体例のみを紹介する解答なども多かった。出題の意図を十分に汲み取ることや、自分の結論を明確に示すことなど、受験者の、小論文課題に対する基礎力の向上が求められよう。

●　文学部比較文化学科　前期日程（総合問題）

＜出題の意図、ねらい＞

全体

様々な文化を理解しようとする際に重要な観点となる自己認識・他者認識について、「顔」に注

目して論述した哲学的文章を出題した。高校「現代文」を想定し、「現代文」所収の評論等を読み慣れていれば、解くことができる問題になっている。例年通り、漢字力も重視した。また、語彙力については、単なる知識としてのみならず、前後の文脈から推測する力を求めた。全体的に、長文を筆者の論理を追って読み取る力、さらに理解したものを説明する文章力を試した。とくに今回は、本文だけではなく、問い自体をきちんと読み取る必要があるものになっている。

問一【書きとり・読みとり)】
　高校「現代文」までに習得した漢字力を試した。

問二【記述問題】
　外来語に関する語彙力を試した。

問三【記号選択問題】
　前後の文章から空欄に当てはまる語彙を想定できるかどうかを試した。とくに、対になる語彙の組み合わせを作ることを要求した。

問四【書き抜き問題】
　比喩表現を読み解いた上で、対応している文章部分に気付くことができるか試した。

問五【記述問題】
　論理的文章における論証の機能が理解でき、それによって導かれている結論部分が指摘できるか試した。

問六【記述問題】
　文章の論理・主題について、具体例を使って説明する力があるか試した。

問七【記号選択問題】
　抽象度の高い語彙の意味を、前後の文脈から類推することができるか試した。

＜答案の傾向＞
　総評：全体として、結構書いていて、まあまあできている答案が多かった。易しい問題では 7 割くらいの正解率があり、普通の問題で 5 割の正解率で、難しい問題では、2 割から 3 割の正解率であった。

問題Ⅰ　英語長文読解
　問１　正答率が非常に高く、誤答は比較的少なかった。誤答の例としては、余計な部分を含めて答えたものや、筆者のコメントの部分を引用したため逆の意味になっている例が目立った。バービー人形そのものを知らないため、イメージが理解しにくかったのではないかと思われる。

問２　英語の文章を読めば、問われている理由と現象が明確に記されている箇所がすぐに見つかるはずだが、意外に正確に答えられている答案は少なかった。英文の量がやや多めだったためか、問われている箇所を見つけることが難しかったようだ。

問３　英文の構造が読み取れている答案は比較的少なかった。直訳をしたあと訳文を読み直していないからなのか、日本語の意味がよく分からない答案が多かった。

問４　個々の単語の意味は取れていても、文章の全体構造を把握できていない解答が多かった。訳文が日本語として不自然な解答や、簡単な漢字の誤記も目立った。“this girl” と “a girl” の混同、“had been shown” が受動態であることを無視した訳文が目だった誤答である。

問５　otherwise の内容がポイントであるが、正確に捉えていた解答は 2～3 割程度であった。reader を‘指導者 leader’と訳して内容も大幅に取り違えている答えが意外に多かった。

問６　正答率は余り高くない。選択式だが、間違い解答に特定の偏りは見られない。

問７　正解を選択する形式だが、正答率は「問６」より幾分高めとはいえ 70%ほど。

問題Ⅱ　英作文

（１）　「ただいま」という表現が以外に翻訳するのが難しかったみたいである。同じ状況では英語でどう表現するかを考えれば「I’m home」という表現が使われるのを思い出せたのではなかろうか？今一度、具体的な状況で言葉が使われることを考えてもらえればとう感想です。

（２）　語彙力が高いのに、文法が正しくない場合も、その反対のケースもあって、全体としては評価しづらかった。ただし、鮮明な相違が見えてきたのは、接続詞の使い方と文と文のつなぎ方であった。接続詞を上手に利用した受験生は、元の文章の理屈を表現したため、より優れている英語の表現力の持ち主であると判断した。語彙力の欠如や文法の乱れがあるか否かを意識しながら、全体の言いましを評価して進んだ。結論として、評価基準が決めづらい問題ではあったが、受験生の英語力をきめ細かく試したのではないだろうかと思われる。

問題Ⅲ

問一　「強迫」が「脅迫」「驚迫」の誤答が、また、「隔」の誤りも多い。

問二　「逆接的」という誤答が多い。漢字で、という条件を満たしていないものも見受けられる。

問三　「対の関係」に考慮が払われていないものが多い。

問四　正答は１割程度。「心の窓」が何か（「目」）がわかっていないからなのではないかと思われる。

問五　問題文の意味をしっかり理解して答案を作成してもらいたい。的外れな内容の答案が多かった。

問六　正答は非常に少なかった。「素顔」とは、客観的な事実としてどのようなものであるか、ではなく、どのようなものとしてとらえる解釈のコードが共有されているか、が議論されていることを理解できていない例が、非常に多かった。

問七　正答率はかなり低かった。「措定」という語彙が日常的に使用されるものではないので、意味がわからなかったと思われる。ただし前後の文脈から判断できる問題なので、丁寧に読めば正答を選択できるようになっている。

●　文学部比較文化学科　後期日程（小論文）

＜出題の意図・ねらい＞

【問題Ⅰ】

問１および問２

食文化に関するエッセイの論点を規定の字数内に要約させる設問により、受験生の英文読解力、英語の語彙力、日本語の文章力を問うた。

問３

問題文の筆者の見解に対する受験生の意見を英語で書かせる設問により、受験生の英語の語彙力、英文構成能力、英文法に関する習熟度、他者の意見を踏まえて自分の意見を述べる能力を問うた。

【問題Ⅱ】

問１

筆者の主張を正確に理解した上で、自身の考えを制限された字数内で論理的に述べる作文力が求められる。受験者の読解力やこれまで外国語を学習する過程で直面したであろう様々な問題を、どのように受け止め、意識し、考えてきたのかなどの思考力も試される。

問２

外国語を学習する際には、日本語と外国語を対応させ、一応同じだということで始めなければ、学習は先に進まないから止むを得ないという筆者の結論に対して、自身の意見を述べる設問であ

る。賛成・反対いずれの意見にしても、そこに潜む問題を文章から正確に読み取り、独自の考えを展開する思考力と説得力ある文章で表現する能力を評価することをねらいとしている。

＜答案の特徴と傾向＞

【問題Ⅰ】

問１

該当する本文の箇所については、ほぼすべての答案が適切な箇所を選んでいた。ただ、説明すべき内容の中で、「アメリカと日本の歴史と地理を反映している」という部分の指摘を落としている答案が大部分であった。この点をふまえた答案はほぼ満点となっているが、落としているため、７～8 割の得点となったものが多かった。

問２

基本的に第 3 段落と第 4 段落の一部の要約である。8 割方が正解していたが、満点にならなかった、微妙な分かれ目は、第 4 段落の一部をどのように書き入れるかの違いであった。

問３

マスターしている単語を使って簡単に表現できた受験生と、思いついた単語を文法を無視して組み合わせて文を作った受験生との間に、かなりの得点差が生じた。解答する前に日本語で内容を書いて、それを英訳すると、より簡単に英作ができたと思う。

設問に正確に対応した解答と、そうでない解答との間に差があったので、英語の表現力に加えて、文章が設問に対応する形で一貫して書かれているか否かを評価した。脈絡のない片言を並べた解答ではなく、全体としてまとまった、自然な英語で書かれた解答が理想であるため、受験生の英語表現力に応じて得点差が生じた。

【問題Ⅱ】

問１

題意を理解していないと思われる答案が、予想外に多かった。「この他には」とあるにも関わらず問題文中の本文を言い換えたものや、飛躍しすぎていて論理構成ができていないもの、見当外れの答案も見られた。誤字の多さも目立った。

問２

傍線部の筆者の見解を読み違えているものがあった。賛否いずれにせよ、論旨がずれているもの、筆者の言葉や用例を自らの論証として無批判に用いているものが多かった。また、画一的な意見が多く、異文化への理解のみならず、言語習得といった学生生活に密着した問題について客観的な思考をめぐらせる機会の少なさが感じられた。

● 文学部人間関係学科　前期日程（小論文）

＜出題の意図・ねらい＞
環境汚染がもたらす影響、その要因と人間社会のあり方について考察する問題である。

＜答案の傾向・特徴＞
【設問１】
　一部分の英文の日本語訳にとどまっている答案が多かった。
【設問２】
　下線部分の意味の読み取りや、具体的説明が十分でなかった。キーワードだけに振り回されるのではなく、何を伝えようとしているのか、筆者の気持ちや観点に立って理解する力が求められる。
【設問３】
　文章１と文章２を踏まえていない答案（自分の意見のみ記述）と、文章１と文章２の要約が中心になり自分の意見まで考察がなされていない答案があった。また、因果関係の考察」とそれに対応した取り組みを、関連付けて論理的に構成・説明されていない答案が多かった。

● 文学部人間関係学科　後期日程（集団面接・グループ討論）

＜出題のねらい＞
　自分自身の見解をテーマに沿って論理的・独創的に表現できる能力、また集団の中で適切なかたちでリーダーシップを発揮していける能力を有する人材の選抜を行う。
なお、討論テーマはあくまでも討論のために設定されたもので、それ以上の意図をもつものではない。

＜特徴と傾向＞
　全体を通して、ステレオタイプの意見や似たような意見が多く、発展した討論が少なかった。また、意見が行き詰まった時や同じ話題展開になった時のリーダー的な人があまり見受けられなかった。

● 法学部　前期日程（小論文）
＜出題の意図・ねらい＞
　出題文の出典は杉田敦『デモクラシーの論じ方』（ちくま新書　２００１年）である。
　今日、「デモクラシー（民主主義あるいは民主政、民主制）を知っているか」という質問に対して、ほとんどの人が「知っている」と答えるであろうし、その価値や重要性について疑う人もほとんどいないと思われる。その意味において、「デモクラシーについての幸福な合意」が成立しているように見える。しかし、著者によれば、「この合意は見かけだけのもの」であり、「人々の間

には、デモクラシーの理解をめぐる考え方の違いがある」のであって、しかも、「その違いは、ささいなものではなく、かなり深刻な対立につながりうるもの」であり、「ふだんはあまり明確になることも」ないが、「時として前面に出てきて、私たちの政治のあり方を大きく左右することになる」と言う。たとえば、住民の代表機関である議会がある公共事業を可決し推進しようとしている際に、住民による直接投票の結果、その公共事業に対して反対の民意が示された場合、「議会の決定を尊重するのがデモクラシーの本質にかなうのか、それとも、直接投票の結果に従うのがデモクラシーのあるべき姿なのか」という、「デモクラシーをめぐる理論的対立」が生じてくる。そして、今回の設問のように、「少数意見の取り扱い方」にも「少数意見をとことん尊重して行くのがデモクラシーにとって重要」という考えや「少数意見を尊重しながらも、最後は多数意見を断固として押し通すのがデモクラシー」という考えがあり、こうした考えの違いが、学級会や委員会、あるいは国会などのあり方をめぐっての対立として表面化してくる。

しかし、著者も述べているように、ＡとＢとの議論から「単一の結論」は出てこない。このことは「対話の不毛さ」を示すものではなく、むしろその逆、「対話の大切さ」を示すものである。なぜなら、「デモクラシーは人々の多様な意見に期待するもの」だからであり、対話とそこから生み出される多様な意見のみが「デモクラシーを生きたものにし、人々の手に政治を取り戻すことにつながる」からである。

本設問は、デモクラシーについてのＡとＢとの会話を読み、「少数派の保護」についてのＡとＢの意見の違いを明らかにした上で、受験生自身の「少数派の保護」についての意見を問うものである。

＜採点講評＞

設問の題意は、「少数派の保護」に関して、対話者の意見の違いをふまえ、受験生自らの見解を記述せよというものである。したがって、解答にあたっては、出題文における対話者の意見の違いを理解していることが前提となる。この点に関しては全般的に良く理解できていた。しかし、対話者のいずれの立場に立つものであれ、あるいは、その否定、統合の立場に立つものであれ、自らの見解ないし具体策を提示する点に関しては、全般的に自らの立場を示すことができていて評価できるけれども、具体策を提示するところまで回答し、設問の意図に十分応えることができたものは必ずしも多くなかった。

●　法学部　後期日程（面接）

〈面接の意図･ねらい〉

法学部では、平成 17 年度から一般選抜後期日程試験において従前の大学入試センター試験結果に加えて、面接による選抜試験を導入･実施している。面接の意図は、センター試験の成績だけではなく、別の角度から目的意識の明確な学生や意欲の強い学生を入学させるためである。したがって、面接で重視するのは、①入学意欲及び入学後の抱負などの受験生の「熱意」、②質問に対する説明（プレゼンテーション・コミュニケーション）「能力」や知識の深さ、③法学部学生として最低限必要とされる論理的思考能力といった「適性」などである。

〈受験生の特徴と傾向〉

面接試験では 3 問が出題された。1 問は、受験生に面接試験開始前に記入してもらったエントリー･シートの内容にかかる問題で、本学法学部を志望する理由、入学後の抱負、将来設計についてであった。本問についての受験生の一般的回答パターンは、法学部を志望する理由などについてはよく回答している。とくに本学法学部志望の理由としては、少人数教育(演習)の充実とオープンキャンパスで好印象をもったと回答するものが多かった。

他の 2 問は、受験生のプレゼンテーション能力、社会的関心、分析的思考力などの適性を見るために新たに設問された。ひとつは、「いじめ」問題についてであり、もうひとつは「裁判員制度」の問題である。前者の問題についていえば、社会的関心の高いテーマであることから、受験生の多くが、その原因や対策などについて自己の体験にもとづき個性のある回答が数多く見受けられた。他方、「裁判員制度」については、その制度の意味、裁判員制度の是非又は成否について問われたが、事前に準備していた受験生が多かったようで、全般的に的確に回答する者が多かったように見えた。

本年度の面接においても、面接態度･話し方・回答の内容などかなり高い評価ができる受験生がいた一方、事前にしっかり準備しすぎたのか、回答をすべて暗記して面接に臨む受験生も見受けられた。全体的な印象としては、比較的多くの受験生が、面接担当者の質問に的確に答えることができたように思われる。

● 国際環境工学部　前期日程（理科･英語･数学）

（理科）

＜出題の意図･ねらい＞

第 1 問～第 3 問　物理

第 1 問

二つの物体およびばねによって構成される運動系に対して、力学的エネルギーの保存則、運動量の保存則を正しく適用できるか、また、単振動の周期についての理解力を問う。

第 2 問

理想気体の状態方程式や内部エネルギー、気体のする仕事、熱力学の第 1 法則などの理解力を問う。

第 3 問

電界、磁界、ローレンツ力、及び等速円運動に関する基礎的な理解力を問う。

第 4 問～第 6 問　化学

第 4 問

物質量および分子式の求め方や、特定の化学反応が予想される異性体の分子構造を答えさせる問題である。

第５問

弱酸と強塩基の化学反応について、実験で得られた結果からどのような現象が起きているか化学的な考察を答えさせる。この解答の誘導をヒントに、溶液中の電離度や電離定数を導かせる問題である。

第６問

化学Ⅱで学習するタンパク質の特徴、特にタンパク質を構成するアミノ酸どうしの結合についての理解度を問う問題である。

＜答案の特徴･傾向＞

第１問～第３問　物理

第１問

運動系の全力学的エネルギーを問う問題については正答率が高かった。しかしながら、力学的エネルギーと運動量を考える問題では，運動量を無視していると考えられる答案が目立った。また、単振動の周期についても理解していないと思われる解答が多かった。

第２問

理想気体の状態方程式の理解度を問う前半の解答率は高かった。ただし、式を整理するときのケアレスミスが多かった。後半の気体の内部エネルギーと気体のする仕事に関しては解答率がかなり低かった。

第３問

電界に関する問[ツ]～[ナ]は比較的正解率が高かったが、磁界、ローレンツ力、及び等速円運動に関する融合問題、特に問[ヌ]～[ノ]の正解率が低かった。

第４問～第６問　化学

化学に関する問題全体に関して正解率は低い傾向にあった。有機化学、無機・物理化学、高分子化学に関して幅広く基礎知識を問う出題である。高校化学の教科書内容を十分に理解してほしい。

第４問

問１　ヘモグロビンの中のヘムの物質量を鉄の物質量から計算する単純な問題であったが、正解率は低かった。特に分子式を求める応用問題に対して完全解答はなかった。

問２　銀鏡反応とそれに関連した分子構造を予測する問いであった。こちらの正解率は高かった。

第５問

問１　高校化学の教科書に記載されている電解質の基本的な定義に関する問であるが正解率は低かった。教科書に記載されている基礎用語について丁寧に学習して欲しい。

問２　高校化学の教科書に記載されている酢酸や酢酸ナトリウムの水中での解離についての基本的な問であったが正解率は低かった。化学式を単に暗記するのではなく、その式からどのような現象が予想されるのか考察する力を身に着けて欲しい。

問３　問２の誘導から酢酸ナトリウムの緩衝作用について説明する問題であったが、完全解答はなかった。

問４　高校化学の教科書に記載されている酢酸の電離度、電離定数を求める問であった。こちらは完全解答できた受験生と、得点できなかった受験生に分かれた。教科書に記載されている公式についても、これをただ暗記するのではなく、実際に式が誘導できるよう解いてみる学習が必要かと思われる。

第６問

問１,４　アミノ酸からなるペプチドやタンパク質の基礎的知識を問う問題であったが、全般的に正解率は低かった。

問２　不斉炭素原子に関する問いでは、誤字が非常に多かった。ここでは高校化学の教科書に準じた用語のみ正解とした。

問３　光学異性体を持つアミノ酸と持たないアミノ酸に関する問いについては正解率が高かった。

問５　ペプチドの基礎的知識を問う問題についても、全般的に正解率は高かった。

問６　説明の記述問題では、概ね正解率が低い傾向にあった。

（英語）

＜出題の意図・ねらい＞

第１問

標準的レベルの構文の解釈力、単語力、熟語力、文脈の類推力をみる。

第２問

１．ラフカディオハーンの生い立ち及び新聞記者としての生き方についての概要を読解させる。

２．パラグラフの展開の特徴を把握し設問に対する解答を見つけ出せるか。

３．標準的な構文、語彙のレベルで各設問に答えられる読解力、単語力、熟語力を測る。

４．英文解釈（和訳問題）により日本語と英語の基本構造を理解しているか。

第３問

自由英作文で概念を英語的発想、内容、正確さ、構成、適切な語彙を使って表現できているかをみる。

＜答案の特徴・傾向＞

第１問

標準的な語彙と構文力を試した問題であるが、Mozart がモーツァルトだと理解した受験生は３割程度であった。See を「わかる」much, more の名詞用法、形容詞用法、副詞用法、また第２文の of から career までの倒置、同格構文等の標準的知識と解釈がほとんど見られない。As の解

釈も 9 割以上が前置詞の「‥として」であり暫時変化を表す「…につれて」という接続詞で解釈できた受験生はほとんどいなかった。小説の冒頭の紹介部分であったため文脈が取りにくかった点は否めないが、解釈の基本的な練習量と語彙力の不足、日本語としての意味形成のための言い換え能力の欠落が明らかである。

第 2 問

A　元来の新聞記者の役割とハーンのそれがどのように違うのかを問う問題。直前にある sympathies for people who were socially rejected が理解できれば、彼自身の生い立ちも重ねて解答できる。

B　of の後ろに what で始まる名詞節の解釈ができていない受験生が多い。第 1 問同様、基本的な語彙力と構文把握力が不足している。他動詞構文を日本語の文形式に言い直せる能力が必要。

C　former の誤解釈が多い。Farmer は農民、formal は形式的な、という別な語である。slave を知らない受験生も多くアメリカの歴史を述べる小説では避けて通れない語である。前文に解答があるので正確に解釈できる語彙力が必要である。

D　直後の soul sympathy や問 5 の言い換えであるが、praise は賞賛、indifference は無関心、admiration は感嘆、dislike は憎悪である。文脈から dislike であるとわかる。

E　ハーンの求めた人生観を問う問題。文脈から類推できるが、直前の “soul sympathy” が鍵を握る。soul は精神性の中核をなすもの、sympathy はよく同情と訳すが、支持、支援の意味もある。ここでは「かわいそう」という日本的情感ではなく積極的な共感と理解である。ゆえに b の仲間としての相互理解が正解である。

全体として日本語の言い換え能力に乏しく、基本的語彙も不足している。誤字脱字もおおく日本語の字体も判読の困難な答案が垣間見られた。しかし予想された正解率は期待を裏切るものではなく妥当な試験問題だと思われる。

第 3 問

昨年同様、形式的な誤りよりも文章全体のつながりや論理構成に多くの配点を課したが、語順、時制、主語と動詞の一致、名詞の数、など文法的な誤りや不完全な文も多く、特にスペルミスが昨年より多く見られ、解答も英語問題文のコピーの多用や同じ内容の文の反復もよく見られた。また初歩的レベルの決まり文句や定型句を事前に練習したと思われる。受験生の解答の中には似た表現も多かった。行数の足りない答案も見られたが、全体的によく書けていたと思われる。

（数学）

＜出題の意図・ねらい＞

第 1 問

確率と数列の融合問題。確率の基礎を理解しているか，漸化式で定められる数列の一般項を導けるかを問う。

第 2 問

三角関数と 2 次方程式に関する問題。三角関数の基礎を習得しているか，2 次方程式の解と係数の関係を理解しているかを問う。

第 3 問

3 次関数と円の方程式を対象として，導関数およびその応用方法を理解しているかを問う。

第 4 問

行列とその応用に関する問題。行列の基礎を習得しているか，行列の表す一次変換を十分理解しているかを問う。

＜答案の特徴・傾向＞

第 1 問

確率と数列の融合問題であり，基本的な確率を求める問題の正解率は高かったが，確率から漸化式を導く過程の正解率は低かった。応用力が低い傾向があった。

第 2 問

設問 1)：不等式の解と三角関数の符号の関係を理解していない答案が見られた。正解率は 50%～60%程度。設問 2)：最大値の正解率は高かったが，そのときの角度の正解率が低かった。設問 3)：解の見落としや計算ミスがあり，正解率はやや低かった。

第 3 問

各設問の正解率は高かった。設問 2)では，変曲点の意味を理解していない解答が多数見受けられた。設問 3), 設問 4)では計算ミスが多く，また計算過程がまとめられていない答案も多かった。

第 4 問

逆行列に関する設問 1)の正解率は 70%程度であった。1 次変換に関する設問 2)，設問 3)の正解率はきわめて低かった。行列で表される 1 次変換を理解していないと思われる答案が多かった。

● 国際環境工学部　後期日程（英語） ―学部共通問題―

（英語）

＜出題の意図・ねらい＞

第 1 問

科学者(scientist)と技術者(engineer)の専門家としての立場の違いを説明した文章（オンライン百科事典より引用）から一部を和訳させる問題で、両者の対比を英語表現から適切な日本語表現に置き換えることができるかどうかを見る。

構文的に言えば、接続詞 whereas の前後にある主節と従属節の関係を正しく解釈できるかどう

かがポイントとなる。

第 2 問

米国エネルギー省(Department of Energy)が初等・中等教育向けに省エネルギーのための効果的な方法を解説した文書から引用した総合問題で、文法（比較構文の等価表現による言い換え)、語彙（類義動詞句の選択）知識の他、英文の趣旨を簡潔に要約できるかどうかを問う。

第 3 問

自由英作文で概念を英語的発想、内容、正確さ、構成、適切な語彙を使って表現できているかをみる。

＜答案の特徴と傾向＞

第 1 問

下線の前の部分から、下線部は科学者と技術者の問題解決の仕方における違いを説明している部分であると類推できる。基本的な語彙である attempt, phenomena, available, knowledge, construct, solutions はきちんと意味を押さえておくべきである。また、対比を示す whereas は解釈で頻出の語であり、これを正確に訳出できる力が必要である。平易な語であるが any を「いくつかの」という誤りが多かった。肯定文の場合は「どの、いかなる」という使い方も一般的である点も押さえておくべきであろう。

第 2 問

A　倍数詞を表す「序数+as+形容詞、副詞…+as」を「the + 名詞 + as…as」に書き換える問題である。As…as の間に入る形容詞を名詞に変える語彙力が必要である。Much は量を表すので文中から amount を選ぶ。

B　make up for=compensate 「補う」、do away with=abolish「廃止する」、cut down on=reduce「削減する」、come up with=overtake, propose「追いつく、提案する」で、正解は(c)である。

C　動名詞を主語としたいわゆる「物主構文」であるが、等位接続詞 and で結ばれた長い主節中の３つの主語(Purchasing, reusing, recycling)を正しく解釈した答案は予想外に少なく、全体の２割程度しかなかった。また、wherever possible といった挿入句的な省略表現も約半数の受験生は正確に訳出できておらず、応用的な読解力が不足していることが示された。

D　本文中のキーワードについて説明した部分を要約させる問題であるが、「本文に即して」という指示にもかかわらず、全く本文の内容と無関係な定義、事例を述べている答案が非常に目立った。また、「実践の内容」と「期待される効果」を混同した答案、Reuse（再利用）と Recycle（再生利用）の相違点をうまく説明できていない答案が各 3 割近くもあり、受験生の日本語表現力にも不安を感じさせる結果となった。

第 3 問

形式的な誤りよりも文章全体のつながりや論理構成に多くの配点を課したが、語順、時制、過去分詞の使用、主語と動詞の一致、名詞の数など文法的な誤りや不完全な文も多く、文頭の but,

because の使用や同じ内容の文の反復も見られた。また決まり文句のような定型句や事前に練習したと思われる、似た表現も多かった。birthrate, social trend の解釈のミスによるものであると思われるが、全く場違いな内容の答案が散見された。今後はパラグラフ構成、主張と具体例、全体のつながり、特に原因を主語、結果を目的語に据えた構文を作成する練習を心がけて欲しい。

● 国際環境工学部環境化学プロセス工学科　後期日程（総合問題）

＜出題の意図・ねらい＞

第１問（数学）

空間における図形の移動と変化をベクトルの活用によって解く問題。図形と方程式の基本的な理解を問う。

第２問（化学）

化学反応と反応熱に関する問題である。高校で履修する化学Ｉの範囲を理解していれば正解を求めることができる。

問１(1)中和反応の反応式を問う問題。

(2)熱化学方程式から中和熱を算出する問題。

(3)中和熱から温度変化を算出する問題。

問２　反応熱についての基礎知識を問う問題。

第３問　選択問題Ａ（化学）

エタノールを題材に有機化合物の反応を理解しているかを問う問題

問 1．基礎用語や反応様式の理解を問う問題

問 2 及び 3．構造式および反応式を理解しているかを問う問題

問 4．元素分析装置の原理および得られたデータを処理できるかを問う問題

第３問　選択問題Ｂ（物理・化学）

物質量と分子量についての理解度と、理想気体の状態変化と内部エネルギーの理解度を問う問題。高校で履修する物理Ｉ及び化学Ｉの範囲を理解していれば正解を求めることができる。

第３問　選択問題Ｃ（物理）

物体の等加速度運動（ニュートンの第二法則）と等速直線運動を理解する力、また、音波のドップラー効果の正しい理解力を問う。

第３問　選択問題Ｄ（生物）

血液の成分や働きに関する問題である。高校で履修する生物Ｉの範囲を理解していれば正解を求めることができる。

問１　血液に関する基本的な知識を問う問題。

問２　血液の働きの一つである恒常性を問う問題。

問３　肺胞から組織に流れた際に、組織で放出される酸素量を計算させる問題。

問４　細胞性免疫について説明させる問題。

第３問　選択問題Ｅ（化学・生物）

細胞膜に代表される半透膜の性質と働きに関する複合問題である。高校で履修する生物Ｉと化学Ｉの範囲を理解していれば正解を求めることができる。

問１　物質量に関する基本的知識を問う問題。

問２　決められた濃度の溶液を、実際に調製できるかを問う問題。使用する器具を頭の中で整理して、筋道を立てて調製法を組み立てられるかが評価のポイントとなる。

問３　半透膜の性質と働きに関する問題。

問４　植物細胞と浸透圧に関する基本問題。

＜答案の特徴･傾向＞

第１問（数学）

ベクトルの方向と長さ，空間座標との関係など，ベクトルの基本事項を正しく理解していない答案が目立った。3 次元空間における球面の移動と方程式の関係を問う問題に対する正答率はきわめて低かった。

第２問（化学）

問１（1）は概ね正答していた。（2）は量論関係を掴めていない解答が多く見られた。（3）は水酸化カリウムの重さを無視した解答が多く見られた。問２は概ね正答していた。

第３問　選択問題Ａ（化学）

全体的に正答率は高かった。問 1、問 2 とも比較的良くできていたが、問 3 の化学反応式をきちんと立てられない受験生が目立った。また問 3 は正答率が低く、基本的な計算問題であったが、計算力のない受験生が目立った。

第３問　選択問題Ｂ（物理・化学）

化学の分子量と物質量に関する問題の正解率はかなり低かった．物理では，理想気体の状態変化に対する正解率はかなり高かったが，理想気体の内部エネルギーに関する問題の正解率はかなり低かった。

第３問　選択問題Ｃ（物理）

ニュートンの第二法則やドップラー効果の基礎を問う問題については正答率が高かった。しかし，等加速度運動や等速運動をする台車の進む距離と時間の関係，距離と速さの関係を求める問題は基礎的な問題であるが正答率が低かった。また，台車の等加速度／等速運動とドップラー効果の関係をグラフで理解する問題も正答率は低かった。

第３問　選択問題Ｄ（生物）

問 1、問 2、問 3 ともにかなり良くできていた。ほぼ 100%に近い正答率であった。問 4 は体液性免疫と勘違いして説明した受験生も目立った。

第３問　選択問題Ｅ（化学・生物）

全体的に正答率は高かった。問 1 では殆どの受験生が正解していた。問 2 は殆どの受験生が正解していなかった。高校で実験を殆ど履修していない影響かもしれないが、このような基本的な知識は大学に入ってから大いに役立つので理解を深めてほしい。問 3、問 4 は概ねできていた。

● 国際環境工学部環境機械システム工学科　後期日程（総合問題）

＜出題の意図・ねらい＞

第１問（数学）

空間における図形の移動と変化をベクトルの活用によって解く問題。図形と方程式の基本的な理解を問う。

第２問（化学）

化学反応と反応熱に関する問題である。高校で履修する化学Ｉの範囲を理解していれば正解を求めることができる。

問１(1)中和反応の反応式を問う問題。

(2)熱化学方程式から中和熱を算出する問題。

(3)中和熱から温度変化を算出する問題。

問２　反応熱についての基礎知識を問う問題。

第３問（物理）

物体の衝突と物体の単振動に関する理解力を問う問題。また、慣性力が作用する場合の物体の運動についての理解力も問う。

第４問（物理・数学）

電圧と抵抗、キルヒホッフの法則、及び確率に関する基礎的な理解力及び計算力を問う。

第５問（物理・化学）

物質量と分子量についての理解度と、理想気体の状態変化と内部エネルギーの理解度を問う問題。高校で履修する物理Ｉ及び化学Ｉの範囲を理解していれば正解を求めることができる。

＜答案の特徴・傾向＞

第１問（数学）

ベクトルの方向と長さ，空間座標との関係など，ベクトルの基本事項を正しく理解していない

答案が目立った。3 次元空間における球面の移動と方程式の関係を問う問題に対する正答率はきわめて低かった。

第 2 問（化学）

問 1（1）は概ね正答していた。(2）は量論関係を掴めていない解答が多く見られた。(3）は水酸化カリウムの重さを無視した解答が多く見られた。問 2 は概ね正答していた。

第 3 問（物理）

力学的エネルギー保存の法則を用いて物体の速さを求める問題は正答率が高かった。しかしながら，弾性衝突，振り子の周期を問う問題では正答率が低く，この分野の内容を理解していないと思われる解答が目立った。また，等加速度運動するエレベーター内での振り子の運動について問う問題も正答率は低かった。

第 4 問（物理・数学）

電圧と抵抗に関する基本問題であったので、問[ア]～[エ]は比較的正解率が高かった。しかしキルヒホッフ電流則に関する理解が不十分であり、問[オ]～[ク]の正解率が低かった。

第 5 問（物理・化学）

化学の分子量と物質量に関する問題の正解率はかなり低かった．物理では，理想気体の状態変化に対する正解率はかなり高かったが，理想気体の内部エネルギーに関する問題の正解率はかなり低かった。

● 国際環境工学部情報メディア工学科　後期日程（総合問題）

＜出題の意図･ねらい＞

第 1 問（数学）

空間における図形の移動と変化をベクトルの活用によって解く問題。図形と方程式の基本的な理解を問う。

第 2 問（数学）

微分法の応用と積分法に関する基本問題。曲線上の点における接線の方程式を記述できるか，2 本の直交する接線の交点を求められるか，曲線とその接線で囲まれた図形の面積を計算できるか，などを問う。

第 3 問（物理）

物体の衝突と物体の単振動に関する理解力を問う問題。また、慣性力が作用する場合の物体の運動についての理解力も問う。

第 4 問（物理・数学）

電圧と抵抗、キルヒホッフの法則、及び確率に関する基礎的な理解力及び計算力を問う。

第 5 問　選択問題 A（化学）

化学反応と反応熱に関する問題である。高校で履修する化学 I の範囲を理解していれば正解を求めることができる。

問 1 (1)中和反応の反応式を問う問題。

(2)熱化学方程式から中和熱を算出する問題。

(3)中和熱から温度変化を算出する問題。

問 2　反応熱についての基礎知識を問う問題。

第 5 問　選択問題 B（物理・化学）

物質量と分子量についての理解度と、理想気体の状態変化と内部エネルギーの理解度を問う問題。高校で履修する物理 I 及び化学 I の範囲を理解していれば正解を求めることができる。

＜答案の特徴･傾向＞

第 1 問（数学）

ベクトルの方向と長さ，空間座標との関係など，ベクトルの基本事項を正しく理解していない答案が目立った。3 次元空間における球面の移動と方程式の関係を問う問題に対する正答率はきわめて低かった。

第 2 問（数学）

多くの答案で，微分積分の基本を習得していることは認められた。しかし，設問の答を正確に要領よく導く能力は高いとはいえず，設問 2)の正解率は予想より低く，設問 3)の正解率はきわめて低かった。また，設問 4)は設問 3)を正解していなければ解けないため，その正解はほとんどなかった。

第 3 問（物理）

力学的エネルギー保存の法則を用いて物体の速さを求める問題は正答率が高かった。しかしながら，弾性衝突，振り子の周期を問う問題では正答率が低く，この分野の内容を理解していないと思われる解答が目立った。また，等加速度運動するエレベーター内での振り子の運動について問う問題も正答率は低かった。

第 4 問（物理・数学）

電圧と抵抗に関する基本問題であったので、問[ア]～[エ]は比較的正解率が高かった。しかしキルヒホッフ電流則に関する理解が不十分であり、問[オ]～[ク]の正解率が低かった。

第 5 問　選択問題 A（化学）

問 1（1）は概ね正答していた。(2）は量論関係を掴めていない解答が多く見られた。(3）は水酸化カリウムの重さを無視した解答が多く見られた。問 2 は概ね正答していた。

第５問　選択問題Ｂ（物理・化学）

化学の分子量と物質量に関する問題の正解率はかなり低かった．物理では，理想気体の状態変化に対する正解率はかなり高かったが，理想気体の内部エネルギーに関する問題の正解率はかなり低かった。

● 国際環境工学部環境空間デザイン学科　後期日程（総合問題・英語）

（総合問題）

＜出題の意図・ねらい＞

第１問（数学）

空間における図形の移動と変化をベクトルの活用によって解く問題。図形と方程式の基本的な理解を問う。

第２問（化学）

化学反応と反応熱に関する問題である。高校で履修する化学Ｉの範囲を理解していれば正解を求めることができる。

問１(1)中和反応の反応式を問う問題。

(2)熱化学方程式から中和熱を算出する問題。

(3)中和熱から温度変化を算出する問題。

問２　反応熱についての基礎知識を問う問題。

第３問（物理）

物体の衝突と物体の単振動に関する理解力を問う問題。また、慣性力が作用する場合の物体の運動についての理解力も問う。

第４問　選択問題Ａ（物理・数学）

電圧と抵抗、キルヒホッフの法則、及び確率に関する基礎的な理解力及び計算力を問う。

第４問　選択問題Ｂ（物理・化学）

物質量と分子量についての理解度と、理想気体の状態変化と内部エネルギーの理解度を問う問題。高校で履修する物理Ｉ及び化学Ｉの範囲を理解していれば正解を求めることができる。

第４問　選択問題Ｃ（実技）

(1)四角錘と平面が交わる時の断面の線を問う基礎的な問題である。

(2)複合した立体の二次元図面を見て、三次元の立体として認識し、描けるかどうかを問う問題である。

＜答案の特徴･傾向＞

第１問（数学）

ベクトルの方向と長さ，空間座標との関係など，ベクトルの基本事項を正しく理解していない答案が目立った。3 次元空間における球面の移動と方程式の関係を問う問題に対する正答率はきわめて低かった。

第２問（化学）

問１（1）は概ね正答していた。(2）は量論関係を掴めていない解答が多く見られた。(3）は水酸化カリウムの重さを無視した解答が多く見られた。問 2 は概ね正答していた。

第３問（物理）

力学的エネルギー保存の法則を用いて物体の速さを求める問題は正答率が高かった。しかしながら，弾性衝突，振り子の周期を問う問題では正答率が低く，この分野の内容を理解していないと思われる解答が目立った。また，等加速度運動するエレベーター内での振り子の運動について問う問題も正答率は低かった。

第４問　選択問題 A（物理・数学）

電圧と抵抗に関する基本問題であったので、問[ア]～[エ]は比較的正解率が高かった。しかしキルヒホッフ電流則に関する理解が不十分であり、問[オ]～[ク]の正解率が低かった。

第４問　選択問題 B（物理・化学）

化学の分子量と物質量に関する問題の正解率はかなり低かった．物理では，理想気体の状態変化に対する正解率はかなり高かったが，理想気体の内部エネルギーに関する問題の正解率はかなり低かった.

第４問　選択問題 C（実技）

(1)基礎的な問題でほとんどが解答できていたが、上から見た図と横から見た図の相関性が良く理解できていない解答も見受けられた。

(2)解答できている例と解答できていない例で、出来具合の差が大きくひらいた。立体がほぼ把握できている事例でも、頂部がまったくできていない事例も少なからず見受けられた。

平成 19(2007)年度入試の出題意図、採点総評　≪推薦入試≫

● 外国語学部英米学科　推薦入試（面接）

＜出題の意図・ねらい＞

全国推薦（英語による面接）

英語の運用能力、特に論理的な英語表現力をみることに主眼を置き、英米学科での勉学の適正にかなう者を選抜する。

地域推薦（面接）

限られた時間の中で、どの程度積極的に自分の意見を述べているか、豊かな知識を持って論理的に意見を述べているか、相手の意見を理解した上で議論を進めているか、議論をリードし、調整するリーダーシップがあるか、といった点を勘案し評価の基準とする。

● 外国語学部国際関係学科　推薦入試（小論文）

課題文は、2001 年 9 月の同時多発テロ後のアメリカによるアフガニスタン攻撃が、アメリカの安全を高めるどころか、むしろ損ないかねないものであること、また、アメリカの安全を高めるには、従来の中東政策を転換すべきであることを主張した英語論文である。

問１では、課題文の内容を的確に理解し、簡潔にまとめる能力、日本語作文力をみる。問２は、2001 年 9 月にアメリカで起こってからも、スペイン、イギリス、インドネシア、インドなど世界各地で起こり、日本の報道でも大きく取り上げられてきたテロ行為という国際社会の平和と秩序を脅かす暴力行為を、どのようにすればなくすことが出来るのか、課題文の作者の意見も参考にして、自分の考えを、きちんと論拠を示し、論理的且つ説得力ある形で提示する能力をみる問である。

＜答案の傾向と考察＞

問１について

問１は課題文（英文）の要約であった。2001 年の同時多発テロ後に米国が行ったアフガニスタン空爆が、米国の安全を高めるどころか、むしろ損ないかねないものであり、米国の安全を高めるためには、軍事力中心の中東政策を転換する必要があるというのが課題文の主旨である。答案は、米国のアフガニスタン空爆が国際法で正当化できない報復のための武力行使に当たることについては理解しているものの、①米国の空爆が、実際にはタリバン政権に不満を持っていたはずのアフガンの人々を、結果としてタリバンやビン・ラディン側に追いやってしまうこと、②米国の空爆がイスラム諸国の反米感情を高め、テロ撲滅に必要な協力を得られなくなり、米国の安全を損なうことにつながること、③テロとの戦いに勝つには、米国は軍事力の行使や経済制裁では

なく、人権・国際法・持続的な発展に重点をおいた中東政策をとるべきであるということについては、精確に文意をつかめていない回答が多く、課題文がやや難解であったと考えられる。

問 2 について

問 2 は、課題文で示された見解を参考にしつつ、テロをなくすために有効であると思われる方法を、その根拠と共に提示することを要求するものである。

課題文では、テロ行為の主体として、国家ではなく、ビン・ラディンという多額の資産を持つ個人とアルカイダという国際的な組織に焦点が当てられているが、殆どの答案では、テロは、文化、宗教、民族を異にする国家間の問題として位置づけられ、異文化、他宗教、異民族への理解が相互に欠けていることに起因するものであり、相互理解を深めることによって解決できるものであるという見方がされていた。しかし、そこでは、テロという暴力的行為が何故相互理解の不足から生まれるのか、また、何故相互理解の深まりによってなくなるのかが十分検討されていなかった。

他には、テロは国家間の経済格差や国内の経済格差が原因であり、その是正がテロ撲滅の有効策となるという答案や、アメリカへのテロに関しては、アメリカの単独主義的で強圧的な政策が原因であるとし、その変更がテロ撲滅には必要であるとする答案など、相互理解の不足とは違った要因に着目するものが少数ながら見られた。しかし、日本政府の対テロ戦争への積極的な関与にも関わらず、テロを日本や日本人にとって重大な問題と捉え、日本や日本人がテロ撲滅のために何が出来るのかを検討した答案は殆どなかった。

● 経済学部　推薦入試（小論文）

＜出題の意図＞

大学教育と卒業後の仕事の関連について開催された座談会「若者と仕事」『世界』第７５３号（２００６年６月）を題材として出題した。

設問１及び設問２

内容を正確に読み取り、適切に要約することができるかどうかをみた。とくに、対立する二つの見解の違いを正確に理解しているかをみた。

設問３

対立する二つの見解をベースに、各見解の是非や特徴を様々な角度から検討できているか、さらに、自分の意見を展開できているかどうかをみた。

＜答案の傾向と特徴＞

設問１及び設問２

答案は、２つの傾向に分かれていた。すなわち、対立する見解の違いを正確に理解し対比できている答案と、違いを理解できていない答案である。

設問３

設問における「職業教育の導入」の意味を理解していない答案が、２～３割みうけられた。逆に、設問の意味を理解するとともに、職業教育を大学に導入する是非についての各見解を正しく読み取り、比較しながら自分の意見を論じていた答案が２～３割あった。

対立する見解のどちらに賛成しても、もちろん構わないが、なぜその見解に賛成するのか、理由・根拠を示している答案が最も好ましく、逆に、対比させているだけで自分の見解を述べていないものは、不十分である。

● 文学部比較文化学科　推薦入試（小論文）

＜出題の意図＞

文章Ｉの内容は、日本人と西洋人のコミュニケーション様式の違いを論じたものであり、文章IIの内容は、日本語の特性の長所と短所を論じたものである。

文章Ｉにかかわる問題については、文章全体をしっかりと把握した上で、問われている箇所を必要に応じて取り出し、それを要領よく要約できる読解力を問うた。また、文章IIに見られる表現を使って、よく使われる日本語の慣用表現を、英語でパラフレーズ（別の言葉で分かり易く言い換えること）できる文章表現力を問うた。

文章IIにかかわる問題については、筆者の主張を理解し要約できる能力を問うた。

最終的に、英文と日本文における、日本人のコミュニケーションの中のあいまいさをめぐる評価の違いを把握し、二つの文章を討論させるように議論を総合して説明できる能力を問うた。

＜答案の傾向と特徴＞

問１

全体的に解答の出来は良かった。ただし、個々の英単語の意味は正確に把握しながら、解答の日本語が不自然な解答が目に付いた。英文を日本語で要約する際には、日本語の正確さにも注意を払いつつ、解答してもらいたい。また、設問が問うている内容に直接関連しない箇所を解答に含めてしまった答案も多かった。

問２

抜き出す個所が明確であったため、解答はかなりよく出来ている。ただし、５０字というかなり少ない字数であるために的確にまとめてキーワードを入れ込む必要があり、正解は２割程度である。キーワードの語彙で、indifference，などの訳ができていない答案が多かった。

問３

「鼻にもかけない」を意訳して「無視する」「気にしない」などと訳していればＯＫで、そのような答案がかなりあった。他方、“She don’t”や“doesn’t be”、“doesn’t conscious”など基本的な文法理解を欠いた答案や、“nose”にこだわって英作した答案も散見された。複数の英文を書いて日本文のニュアンスを伝えようとした答案も比較的多く、正しいニュアンスが伝わっていれば得点を与えている。

問４

「日本語の即物的な性格」について、単に筆者が「良い」と評価しているか、「悪い」と評価しているかを書いている回答が目立った。日本語は主観的な言語だと指摘しながらも、その理由に関しては、筆者の主張を正しく読み取り、それを理論的に整理しまとめることができていない回答が多かった。

問５

回答の多くに、主述の関係がおかしい文、接続詞の誤用等がみられた。また、キーセンテンス・キーワードが読み取れているにもかかわらず、それを日本語の文章としてまとめる力（論理構成の能力）が不足している回答がほとんどであった。

問６

２つの文章の違いを把握し、議論ができるかどうかを問うた設問だったが、先入観で自分の考えを述べたり、体験談を書いてみたり、また、２つの文章の内容を混同して議論したりといったような、設問の意図が理解できていないものが多々あった。比較をする上で必要な、議論のトピックあるいは相違点の認識がなされないまま論を進めているものが多かった。文章の理解度については、英文の方は比較的理解できていたが、日本文の方は理解が不十分だった。

● 文学部人間関係学科　推薦入試（小論文）

＜設問の傾向＞

英文、日本文で書かれたそれぞれの文章を読み、３つの設問に答えるという形式の問題を出題した。

問１及び問２は英文読解力を問い、問３は２つの文章をふまえた上で、受験者の見解を 1000 字以内で書かせる小論文を課した。

＜出題の意図・ねらい＞

近年、元来大人向け製品使用者の低年齢化傾向が顕著である。例えば、携帯電話は少し前までは、高校生程度が使用者としては最も低い年齢層であった。しかし、最近では、諸事情から、小学生でも携帯電話を持っていても珍しくはない。

和文で述べられている小中学生向けの化粧品もその例である。この引用文では、小中学生が化

粧をすることについて、親の多少の心配はあるものの、比較的好意的に描かれている。子どもは、少女のちょっとした憧れを実現することができ、親は子どもの主体性を尊重し、子どもを信じている。そういう構図である。

しかし、英文では、元来ティーン向けの製品だったものを低年齢層に向けたて売り込む販売戦略の営みが描かれている。販売対象年齢を引き下げて売り込みをはかるのは、現代の子どもたちが世間に順応しなくてはならないような社会の趨勢にあるためであるとまで言い切っている。

小中学生が化粧を買い求めるのは、はたして少女の憧れなのか、企業の販売戦略にからみとられたためなのか。結論を出すのは難しい。

小論文では、このような問題点に加えて、情報化された社会のなかで、幼い頃からメディアに晒される現代の子どもに対する、情報、消費教育の観点からの考察も期待している。

＜採点基準＞

問１　下線部①の内容説明。

採点は３つの観点（妥当性，論理性，英文読解力）に基づいて行っている。

問２　下線部①の理由説明。

採点は３つの観点（妥当性，論理性，英文読解力）に基づいて行っている。

問３　文章１の「企業の販売戦略」と文章２の「日本の子どもの現状」についての意見表明。

採点は妥当性，独創性、論理性，表現力などの観点に基づいて行っている。

・「２つの文章をふまえて」、「1000 字以内で」という条件を満たしているか。とりわけ、英文の読解力がないと２つの文章をふまえることが難しいので、小論文に英文の文章が反映されているか（妥当性）。

・「ステレオタイプな意見ではない」「具体例がユニークである」等の内容になっているか。設問の趣旨を的確に捉え、小論文の主題に独自性や新しさなどがあるかどうか（独創性）。

・結論に到達するまで内容が深められ、文章の流れがわかりやすく，説得的かどうか（論理性）。

・文章表現の洗練度、誤字・脱字等がないかどうか（表現力）。

＜解答の傾向＞

問１

正しい日本語で簡潔に説明されていないものが多い。

英文を誤読しているもの、特に originally designed for older kids の部分の誤読が目立った。

また、英文の構造をつかんでいない為の誤読（例えば、名詞を動詞と勘違いしているための誤読等）も多かった。

解答は、ただ英文を訳すのではなく、要点を自分の言葉で明快に説明することが期待されていた。

問２

social trends, contemporary children, divorced family などの語句を十分に理解しきれていない解答が目立った。

設問とは直接関係のない部分を訳している解答も見受けられた。

「社会的な流れ」が原因であるということが把握できていない解答が多く、それが把握できていても、その後に続くべき「流れ」の説明が不十分なものが多かった。

しかし、十分に読みこなせ、自分の言葉として説明できている答案も数は少ないが見受けられた。

問３

・総じて、似たような解答が多かった。英文の読解が間違っていると思われる解答が目立つ。日本文のみを読んでまとめた考えだけで書いているためではないか。特に独創性と論理性が欠けている。
・一般的な中学・高校での化粧についての話の例示、子どもの「化粧」の是非について言及した小論文が多く、企業の販売戦略との関連で論じたものが極めて少なかった。
・前もって受験準備したものにすりあわせたような内容が多く、暗記してきた文章のようなものが流暢に書かれている反面、出題文や設問の趣旨とのずれを起こして論旨が崩れてしまったものもあった。
・出題文の事例についてではなく、ケータイ、コミュニケーション、スポーツなど、別の子どもの社会問題を例示したり、あるいは社会全般の問題に広げ考える為に、焦点がぼやけてしまったりしたものなどもあった。
・論理的に通じないまま書き始め、途中で書ききれなくなっている小論文も見受けられた。

● 法学部　推薦入試（小論文）

＜設問の傾向＞

設問の題意は、出題における著者の主張をふまえ、受験生自らの見解を賛成・反対いずれかの立場に立脚して記述せよというものである。したがって、解答にあたっては、著者の主張を理解していることが前提となり、その上で自らの見解ないし具体策を提示することが求められる。

＜出題の意図・ねらい＞

出題文の出典は勢古浩爾著『「自分の力」を信じる思想』（PHP 新書　2001 年）である。

現代の日本社会は、勝ち組と負け組、金持ちと貧乏人に二極化しつつあるといわれる。「まじめ」や「努力」はもはや意味をなさない。勝つべく者は勝つべくして勝ち、負ける者は負けるべくして負ける社会の出現である。それはまた「力」の意味を信奉して「他者よりも優越した人生」を送ろうとするものと、「力」を否定して「自分なりの楽で自由な人生」を送ろうとするものにわかれるということでもある。筆者は、背景には、いまの日本の「努力しても仕方がない（する気になれない）社会」になりつつある現状があるという。そして、本書にいう「自分の力」が目指すのは、依然としてひたすら努力し、「まじめ」に全力で生きていくことにあるという道であり、それが「生きる力」であるという。そこには、どんな時代になろうと、努力することには断固として意味があり、努力した者には、それを放棄した者より確実に「自分の力」がつくという筆者のメッセージが込められている。

人間関係がいっそう複雑になっている現代社会においては、「自分の力」が欲しくても、環境や制約や障害によって「力」をつけることができない場合があり、また、自分の「力」を信じる拠り所が持てず、自らの可能性を摘み取ってしまう者が多い。しかしながら、それでもなお、人は人との関わりの中でこそ、「自分の力」を身につけることができると筆者は主張している。

本問は、著者のいう「一階」と「二階」の意味を把握した上で、出題文に示された筆者の「一階」と「二階」の関係性についての理解度を問い、私たちがいかにして自分（一階）と社会（二階）の間を生きていけばよいのかについての見解を問うものである。

＜採点講評＞

著者の主張の理解に関しては、設問において「筆者の見解をふまえ」などその旨を明示してはいなかったものの、著者の主張にまったく触れずに自分の考えのみを記述した答案は、さほど見受けられなかった。すなわち、多くの答案は、問題文から著者の主張の要点を把握し、自分の言葉でまとめていた。

著者の主張を前提とする自分の見解については、筆者の主張に賛成ないし反対の立場を明言した上で、自由な発想をまとめた個性的な解答が多数見受けられた。また、著者の立場に反対ないし賛成する立場、どちらもほぼ同じ比率で見受けられた。受験生の小論文執筆能力に加え、柔軟な発想を十分に引き出せていたと評価できる。

● 国際環境工学部環境化学プロセス工学科　推薦入試（総合問題・面接）

（総合問題）

＜出題の意図・ねらい＞

第１問　環境に関する時事問題として、バイオエタノールに関して書かれた解説文の一部を示し、これに関する意見を求める問題である。

問１　基礎的な化学反応式を問う問題。化学反応式が正しく書けるかどうかを評価する。

問２　温室効果ガスや京都議定書と言った一般常識を問う問題。一般常識を正しく理解しているかどうかを評価する。

問３　バイオエタノール生産と環境問題に関する意見表明を求める問題。文章表現力を含め、論理的に意見表明ができるかどうかを評価する。

第２A 問　電気分解と電池に関して、物理分野と化学分野の基礎知識を問う問題である。

問１　オームの法則、電流による仕事、電気量などの物理的な基礎知識と、電気分解に関する基礎知識を問う問題。基礎概念について正しく理解し、計算が正確にできるかどうかを評価する。

問２　電池の一例と、その原理についての説明を求める問題。電池の原理を正しく理解しているかどうか、また、論理的に原理を説明できるかどうかについて評価する。

第２B 問　気体の溶解と植物の光合成に関して、生物分野と化学分野の基礎知識を問う問題である。

問１　酸素の水への溶解度とヘンリーの法則の理解を問う基礎問題。基礎概念について正しく

理解し、計算が正確にできるかどうかを評価する。

問２　水生植物の光合成、呼吸による溶存酸素量の日変化の要因を考察する問題。光合成や呼吸について正しく理解しているかどうか、また、論理的に現象を説明できるかどうかについて評価する。

＜採点講評＞

第１問

問１　基礎的な化学反応式であったが、正確に書けていない答案が多かった。

問２　植物の有機物生産に関する説明まで含めた答案が少なかった。

問３　単なる事実の説明のみで意見表明に至っていない答案が目立った。また、論理性に欠ける文章が目立った。

第２A 問

問１　オームの法則、電気分解による物質の生成量などの基礎的な問題であったが、基本の理解が不十分と思われる答案が多かった。

問２　電池の原理に関しては概ね理解していたが、これを的確に説明できていない答案が多かった。

第２B 問

問１　気体の溶解に関する基礎的な問題であったが、基本の理解が不十分であるという印象を受けた。

問２　光合成と呼吸速度の日変動に関しては良く理解できていたが、これを的確に説明できていなかった。

（面接）

＜面接内容＞

基礎学力、意欲、コミュニケーション能力、人物・その他、の各項目について評価した。

＜感想＞

意欲と人物・その他の評価項目に関しては概ね良好であったが、コミュニケーション能力に欠ける受験生が数名あった。また、基礎学力に関しては、不足している受験生が目立った。

●　国際環境工学部環境機械システム工学科　推薦入試（総合問題・面接）

（総合問題）

＜出題の意図・ねらい＞

第１問、第２問とも、

①物理と数学の基礎理解力と応用力、

②文章を読んで、その内容を正確に把握する能力、

③自分の考えを正しく人に伝えるための論理構成力と表現力、
を評価するための問題である。

第 1 問

題材は物理の等速円運動と数学の微分法とベクトルに関するものであり、説明文をもとにして、位置と速度と加速度を導出する問題である。

第 2 問

ばね振り子と単振り子を題材に、単振動の基礎式の導出や実験方法の論理的な説明などを求める問題である。

＜採点の基準＞

第 1 問、第 2 問とも、出題の意図で述べた①、②、③の観点から、主として論理展開の正しさによって採点する。結果は合っていても導出過程を示していない答案や、導出過程が正しくない答案には点を与えない。

＜答案の特徴と傾向＞

第 1 問

微分法の応用として数学Ⅲの教科書に載っているレベルの内容であるが、出来は良くなかった。ベクトルや微分の基礎が理解できていないと思われる答案が少なくなかった。ベクトルの内積を使って直交性を示すことができた答案はなかった。

第 2 問

答の式を公式として覚えているが、導くことができない答案や、単振動の変位の式を書けない答案が目立った。ばねの位置エネルギーが分からない答案も少なくなかった。実験の説明に関する問題では、得点に差がついた。

（面接）

＜面接の形態＞

受験生 13 名について、一人 10～15 分間の個人面接を実施した。

＜面接内容と出題の意図＞

設問 1）志望の目的に関する質問

環境機械システム工学科を志望する目的、何を学びたいか等を質問し、学科についてどの程度理解しているのか、入学した場合の学科への適合性などを見極める内容としている。

設問 2）物理についての質問

機械工学を学ぶ上で、物理の３つの分野についてどの程度正確に理解しているかを問う問題を口頭にて質問し、板書などをさせる。

＜感想＞

設問 1）ほとんどの受験生が、今日の環境問題に対応できる学部であるとの認識から本学を志望したと述べた。

オープンキャンパスへの参加やホームページによる知識を披露し、本学科への志望を述べる受験生が多かった。事前に準備していることがよくうかがえる。

「環境」という言葉に偏りすぎている印象を受けた。

設問 2）に対しては、基礎的な問題であるにもかかわらず、できる受験生とできない受験生の差が大きかった。

3 つの質問により、学力の判別と同時に問題解決に取り組む意欲の有無が評価できた。

● 国際環境工学部情報メディア工学科　推薦入試（総合問題・面接）

（総合問題）

＜出題の意図・ねらい＞

第 1 問

簡単なオームの法則と行列式を用いて電気回路を解く問題で、文章を読んで受験生の基本的な知識と論理的思考を読みとることを意図している。また（３）と（４）の小問では数学の知識や思考力をみた。

第 2 問

文章を読み、運動、速度、加速度について答える基本的な問題であり、単純に暗記でなく、論理的思考や力学の基礎知識と理解力をみることを意図している。

＜答案の特徴と傾向＞

第 1 問

約３割の受験生は理解できており、成績は二極化していた。小問（１）と（２）は中学生レベルの知識で簡単に解ける問題であり、調査書の成績は全くあてにならない。また（３）（４）について数学的な知識を問う問題であり、決して難しい問題でなかったにも拘らず約８割の受験生は解けていなかったのはやはり勉強不足かと考えられる。

第 2 問

易しい問題であり、簡単な文章力と中学生の知識があれば半分以上は解ける問題であった。物理現象などについて基本的な思考力が不足しており，暗記中心の受験勉強の弊害であると感じさせる答案が多かった。

（面接）

＜面接内容＞

なぜ本学科を志願したか，入学してから何を学びたいか，目標はあるか，などの質問に答えてもらった。

また，物理Ⅱを学習しているか否かを確認した。

さらに，数学の基礎学力を確認するため，2，3 題の基礎的な問題（数学Ⅰ・Ⅱ・Ａ・Ｂ）に解答してもらった。

＜感想＞

質問への答えは，暗記してきた内容をそのまま話しているような回答もあったが， 本学科で学びたいという意欲を感じ取れる回答が多かった。

また，大半の受験生に対して，数学の基礎学力を認めることができた。

● 国際環境工学部環境空間デザイン学科　推薦入試（総合問題･面接）

（総合問題）

＜出題の意図・ねらい＞

第 1 問

与えられた課題に対し、豊かな発想や個性的なアイデアを提案できる能力を有するかを確認し、その上で、日常生活での観察力、材料の強度や重さなどの物理的および構造的感覚や、表現力・文章力・スケール感覚・論理性などを問う問題とした。また、さまざまな状況を想定して計画や設計を行うための素養を見るため、小規模な公園内に設置する遊具という目的を持った場を想定し、限られた条件で、いかに適格で実現可能な、また、独創性に富む発想ができるかどうかを問う出題とした。

短い時間でアイデアを出し、そのアイデアをいかに巧みにスケッチと文書で表現できるかをみる問題である。

問ごとのねらいは、下記の通りである。

問１　遊具のデザイン上での着眼点や発想を文章によって、簡潔にまた分かり易く表現できるか、論理的に文章を書く能力が備わっているか

問２　スケッチを用いて分かり易く、意図や考えを説明ができるか、また、建築系としての基礎的素養となる立体感覚や、立体造形に関する表現力

第 2 問

この問題は、日常何気なく見ている街中の工事現場を周辺から観察して、もし自分が工事現場の中で監督をする立場に立った場合に周辺に対してどのような配慮をしたらよいか問うものである。身近にありながら見過ごしている問題に対して自分の持つ経験・知識・洞察力を総合して論を纏め、論理的に論旨を展開する構成力・表現力を問うことを意図している。

第 3 問

近年、世界的に普及している建築物の品質や性能、環境負荷等の指標、いわゆる建物の環境ラベリングに関する問題である。建築環境性能効率指標 BEE の定義式を示し、その指標の概念、本質、特徴を理解できたかを問う問題である。また、その指標の数値の高い建物が具体的にどのような建物であるかを問うことにより、応用力や思考展開能力を把握することを意図している。

＜答案の特徴と傾向＞

第 1 問

問 1　ほとんどの解答が安全性を優先する内容の記述であった。ただ安全性が重要であるという抽象的な論述だけではなく、遊具に対する具体的な安全上の配慮を論理的に書いた解答も多数あった。

問 2　円盤と立方体という基本材料を造形的に構成しているシンプルなデザインは少なかった。説明文とスケッチが整合している丁寧なデザインもいくつか見られた。一方、基本材料以外の材料を多用し複雑で規模が大きくなったり、立体表現としての矛盾が目立つなど、説明のイメージが的確に表現できていない答案も見受けられた。

第 2 問

ほとんどの受験生が「騒音問題」を挙げ、これに対する対応を述べていた。対策で最も多かったのは防音シートで現場周辺を覆う、作業の時間帯を工夫するなどであった。これらは実際に取られている対策である。また、多くの受験生が建設廃棄物の問題を挙げていた。これは本学が環境系の大学であることを前提に準備してきて、これを無理に本問題に結び付け、リサイクルなどの対策を挙げていたが、これは直接的には近隣対策とは関係のない問題である。近隣住民とのコミュニケーションを挙げた答案が数例あり、実際の現場で最近注目されている事項である。現場見学会・体験コーナーなどの開催を挙げたものもあり、アイデア溢れる解答であった。

第 3 問

両設問共に建築関連で近年メディアに取り上げられる題材を例にあげて答えている学生が多かった。（問 2）では、専門用語を交えて詳細に説明した答案もあったが、一部、題意を無視して、一般に環境に良いと言われる建物を取り上げて、その抽象的な説明にとどまったものも見受けられた。

（面接）

＜実施方法等＞

3～４名を 1 グループにして 15～20 分間の面接を行った。環境空間デザイン学科に対する志望動機や大学・学科で何を学びたいか等を質問し、学科への適合性を確認した。さらに、将来への展望につき回答を求めるとともに、社会における建築関連の話題に関してどのように関心を示し、考えているかを引き出すことを試みた。

＜感想＞

ほとんどの学生は、オープンキャンパスに参加しており、ホームページおよびパンフレットによって詳しい学科情報を入手していた。また、社会における建築関連の話題としては、環境問題、談合問題、建築耐震偽装問題、最新建築事例などが出され、その内容は的確なものが多かった。受験生の下準備の跡が見られた。